



74. マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)

図版30

英名 Pacific oyster, Japanese oyster

露名 устрица

地方名(北海道) カキ

漢字 牡蛎、牡蠣、蛎

アイヌ語名 ビハ、シュウカルセイ、アッケシ

**【形態】** 岩などに固着して生活するため、殻の形は変化に富み一定していない。殻の輪郭はやや丸く、楕円形から長楕円形となる。北方系のもは大型で細長く、殻高\*が35cmに達するものもある。これを特にナガガキまたはエゾガキと呼ぶことがある。一般的な二枚貝と違い、左右の殻の形が異なる。左殻で岩などの他物へ付着し、その内面は深くくぼむ。右殻は左殻より小さく、膨らみが弱くて平たい。殻の表面には板状の成長脈\*があり、ときに波状または管状棘\*に発達する。殻の色は黄白色で、紫褐色の放射帯がある。内面は白色から灰白色で、筋痕\*は白色から紫色を帯びる。蝶番\*部分には歯はなく、黒から黒褐色の弾力性のある靱帯\*がある。殻のほぼ中央には成長とともに後閉殻筋\*が発達した貝柱があり、前閉殻筋\*は退化している。

**【生態】** サハリン、北海道、本州、四国、九州、沖縄の日本全域、朝鮮半

島、中国、東南アジアまで広く分布する。塩分\*が多少低い内湾の干潮線\*付近にある岩礁<sup>がんしょう</sup>やれき\*に付着して生息する。

水管\*を持つほかの二枚貝とは異なり、大きなえらを発達させ、大量の海水を取り入れ、ろ過することによって、その中に混じる有機懸濁物\*<sup>けんたく</sup>や、主に珪藻\*<sup>けいそう</sup>類や鞭毛藻類\*<sup>べんもうそう</sup>などの浮遊性の藻類を餌とする。

マガキは雌雄異体\*で卵生\*。1個体が産み出す卵の数は5,000万～1億粒とされる。産卵期はだいたい6～8月。水温が23～25℃になると産卵する。十分に成熟\*した状態なら、水温の上昇や降雨その他による塩分\*の低下などの刺激で放精、放卵を始める。卵は直径50～60μm。

海水中で受精し、1～2時間後に分裂を始め、桑実胚\*<sup>そうじつはい</sup>、トロコフォア\*幼生\*<sup>たんにりんし</sup>（担輪子幼生）、ペリジャー\*幼生（被面子幼生）を経て約24時間で殻高約70μmのD型幼生\*となる。このころから餌をとり始め、約2週間で殻高300μmに達し、浮遊生活から付着生活に移る。この時期に足ができ、泳いだりほふくしたりを繰り返して付着場所を選ぶ。適当な場所に至ると左殻を基物に付着させて横になり、セメント物質を出して2～3分で固着する。固着した個体は、えらが急速に発達するとともに、殻がキチン質から石灰質に変わり、稚ガキの形態となる。生後1カ月で殻高3mm、1年で5～6cm、2年で8～10cmに成長する。